

JR大津駅のすぐ傍に小さな祠がある。その前の立て札の説明書を読むに、この中に「山吹地蔵」というお地蔵さんが安置されているらしい。栗津の戦で討死した木曾義仲の愛妾、山吹御前を祀っているのだそう。義仲を追い、当時この地にあった秋岸寺という寺の境内まで来た時、敵の手にかかり命を落とすという。

(栗津で戦ったんか。知らなかったな)

賢一は、苦笑した。

日本史は嫌いではない。いや、むしろ好きな方だった。大学入試でも社会科は日本史を選択したくらいだ。だが、木曾義仲が何処で討死したかなど、習った記憶はないし、そんなこと、いままで考えもしなかった。

(ま、俺は理系やからな)

賢一は、自分自身に使い古した言い訳をしてから、

(そもそも、なんで今日に限って、こんなところに足を止めたんやろ)

と、今更ながら疑問に思った。

大津駅は実家の最寄り駅ではある。が、滋賀県にいた頃は車ばかりで、JRなんて滅多に乗らなかった。しかし、それでも子供の頃から、何度となくこの祠の前は通っている筈だ。それに二年前からは、仕事の都合で京都に移り、帰省の度にこの駅を利用してはいる。

けれども、これまで全く気付きもしなかった。今日初めて祠に気付き、初めて立て札の説明書を読んだ。

(木曾義仲の愛妾、確か、もう一人居ったよな)

賢一は、巴御前のことを思い出した。

巴と山吹、この二人を比べると、巴の方がはるかに有名だ。

眉目秀麗才気煥発の才色兼備、その上、馬にも乗れる、剣も使える、へたな武士よりよほど役に立つ。子供の頃、高校生だった姉が夢中で読んでいたフランス革命を題材にした漫画『ベルサイユのばら』の主人公、男装の麗人オスカルも真っ青という女性だ。

山吹も、眉目秀麗、才気煥発の才色兼備ではひけを取らなかったが、いかにせん、おとなしかった。おしとやかな女らしい女性だったのだ。

(そう言えば、古典で習った)

平家物語。

最後の戦にも、巴は義仲の傍に居た。だが、もうだめだと悟った義仲は、女を連れていたと知れば恥になると、巴に、落ちることを命ずる。

(それが、栗津だったか何処だったか、覚えてはいないが……)

恥になる云々は本心か、はたまた巴を助けるための口実だったのか。

(恐らく両方やったんやないかな。男の見栄と優しさか……。なんか義仲さんの気持ち、わ

かる気がするな)

賢一は、妙にしみじみとなっていた。

(それにしても、可哀想に……)

賢一は、山吹のことを思った。

出陣する二人を見送りながら、

(なんで、わたしだけ……)

と、寂しい想いをしたに違いない。嫉妬で眠れぬ夜もあったろう。

戦の旗色がわるくなって、

(もはや京で待っていては……)

と、意を決して追ってきたのに、愛しい人は既に亡く、それも知らぬまま、自分もこんなところで敵の手にかかって生命を落すとは。

(たしか膳所の義仲寺に「巴地藏」というのがあったよな)

賢一は思い出した。

義仲寺という名前から、場所も場所だし義仲の墓もあるのだろう。巴地藏は、そこにある。同じように、地藏とまつられていても、巴は義仲とずっと一緒にいるのに、山吹はこんなところに独りで居る。

(確か二人、従姉妹同士やったんやなかったっけ。ということは、身分も変わらないのに、この差はなんなんだ)

賢一は、少しばかり義憤を覚え、

(ちよっと、手を合わせて行くか)

と、祠に近づいた。そこで、

(あっ)

賢一は、躓いた。倒れそうになる体勢を整えようとしたが、ダメだった。

(ああ、こけるー)

そう思うと、暗いトンネルのような所を、かなりのスピードで通りぬけた。

気が付くと、辺りの風景が全く変わっていた。

駅もないし、線路もない。近くにあったコンビニもなくなっている。

今、賢一の居る所は、木が鬱蒼と生い茂り、はるかに寺と思しき建物が見える。

『この地にあった秋岸寺境内まで辿りついたとき……』

立て札に書いてあった文が、頭に浮かぶ。

賢一は、背筋が寒くなった。

「タ、タイム、スリップ……なんちゃって」

無理に笑おうとした。だが、笑えない。ただ茫然とその場に立ちつくした。

どれくらいの時がたっただろうか、日が陰り風がでてきた。

冷たい風に頬を撫でられ我に返った賢一の目に、二人連れの女性が近づいて来るのが見えた。

賢一は、思わず木の蔭に隠れた。

二人の女性の服装は、現代のものと明らかに違う。認めたくはないが、平安末期から鎌倉時代のものだと思われた。思ってから、なんで自分にそんなことが解るんだろうと、賢一は首を傾げた。

「んなあほなこと…、これは夢や。俺は夢を見てるんや」

賢一は、自分自身に言い聞かせた。

女性二人のうち、一人は二十歳をすこし越えたくらいだろうか、美人で品があり、見るからに身分の高いお姫様という感じだった。

（山吹御前に違いない）

何故か、賢一は確信した。

もう一人は、それより少し年上か。お供の侍女という感じで、これまた、美人だった。

突然、侍女が、山吹をかばうように前に出て、身構えた。

（まづい！見つかったか）

賢一も身構えたが、違っていたようだ。

侍女の視線の方向を見ると、数人の侍たちが物影から飛び出して来た。そして、彼女たちを取り囲んで捕まえようとした。

恐らく乱暴目的だろう。侍女が必死に山吹をかばって抵抗している。

暫く揉み合った後、業をにやした侍の一人が、刀を抜いて斬りつけた。

侍女はその場に倒れ、やがて絶命した。

「寄るな！」

山吹は、下卑た笑いで近づこうとする侍たちを一喝した。

侍たちは、彼女の勢いに圧され、一瞬、動けなくなった。

賢一も、身動きひとつ出来なかった。

にもかかわらず、山吹を助けたいと思った。

（今、可哀想な山吹を助けてやれるのは、自分しか居ないじゃないか。助けなきゃあ。そうだ、助けよう）

（いや、待てよ。でも、もしこれがタイムスリップなら、自分がかかわることによって歴史がかわる。そんなことしてもええんか？）

（そんなあ、タイムスリップなんてことがあるはずないやないか。これは夢や。そうや、夢に決まってる。自分の夢の中やったら、どんなことをやってもええはずや）

（そやけど、万が一……）

(いや、よしんばこれがタイムスリップであっても、インフレーション宇宙って言うたっけ、ちゃうわ、えーと、そうや、パラレルユニバース、並行宇宙。宇宙って沢山あるんやった。タイムスリップって、宇宙間の移動、たしかそうやった。そやったら、これは俺のもと居た宇宙やないんや。こっちの宇宙では、今が現在、うん？おかしいか。まあ、ええわ。とにかく、元の宇宙とは違う宇宙なんや。そやから、どう変えようが俺達の宇宙とは関係ない。俺達の歴史には影響ない。そやから山吹さんを助けてもええんや)

長考の末、賢一はそう結論を出した。

その思考は十分に論理的ではあった。にもかかわらず、大切なことが欠落していた。それは賢一の戦闘能力に対する考察だ。友達と取っ組み合いの喧嘩もしたことがない賢一が、闘いのプロとも言えるこの時代の侍と闘って首尾よく山吹を助けられる道理がない。簡単に賢一自身までやられてしまうに違いなかった。違いなかったが、人生何が幸いするかわからない。

この場合、長考がよかった。考えている間に事が終わってしまったっていたのだ。

賢一が考えている間に、侍たちは山吹に襲いかかった。

山吹は必死に抵抗した。

いくら必死に抵抗しても、女一人に数人の男、結果は火を見るよりも確かだ。と思うが、それは少し違っていた。山吹は、ある意味抵抗しおうせた。必死で抗う山吹に手を焼いた侍たちが、一瞬ではあるが全員、山吹から離れた時があった。その一瞬に山吹は、懐剣を抜いて自分の胸を刺した。

山吹の身体がその場に崩れ落ちた。

侍たちは、また、動けなくなった。

その時、やっと賢一に山吹を助ける決心がついたのだった。

ということ、山吹は助けられなかったが、賢一自身がやられることからは免れたのだ。

(晩かった)

賢一は、自分の決心が後れたことを知り、呆然と立ちつくした。

辺りは物音一つせず、賢一には自分の心臓の音だけが大きく鳴り響いて聞こえていた。

賢一は、動かなくなった山吹の骸を、後悔とも安堵ともどちらともつかない気持で、じつと見ていた。

そんな賢一が、

(うん?)

と思った。

山吹の表情だ。静かなのである。いや、静かというより、幸せそうなのである。こんな無残な死に方をしたのに、微笑みさえ浮かべ至福の表情をしているのだ。

「なんで？」

思わず咳いた声が、侍たちに聞こえたらしい
彼等は辺りを見まわし、やがて、賢一に気が付いた。
侍たちが近づいてくる。

「あかん！逃げな」

走り出した時、また、躓いた。

そしてまた、暗いトンネルを通り抜けた。

トンネルを出たところで。後ろから腕を掴まれた。

（あああー）

侍たちに捕まったと思った。

「賢ちゃん」

振り返ると、幼馴染の美佐子の顔があった。

「美佐子…」

賢一は、辺りを見まわした。

コンビニがある。駅も線路もちゃんとある。

「賢ちゃん、大丈夫？こける前やったから、頭打ったわけやないし、ほんま、どないしたん」

美佐子は、半分からかっているようだったが、しかしもう半分は、本気で心配しているようだ。

「美佐子、俺、どうしてた？」

「え、どうしてたって…、なんか山吹地蔵の説明、熱心に読んでる人が居てるなあ思て見たら賢ちゃんやん。で、傍まで来て、声かけよ思たら、賢ちゃん、けつまずいてこけそうになったから、支えてあげたんやん」

躓いてこけそうになったところまでは覚えてる。それから、あちらへ行つて、秋岸寺境内で山吹の最期に出くわして、こっちの世界に戻ってきた時、美佐子に支えられていた。聞きたいのは、あちらに行っている間、こちらで自分はどうかだったかということだが、どうもあちらに行っていた時間は、こちらでは瞬時だったらしい。

「ほんまに、大丈夫？」

美佐子は、今度は心底から心配そうに、賢一の顔を覗きこんだ。

賢一はボーッと、脱力状態だった。理解出来ないことだらけなのだが、それを理解出来ないことすら出来ない状態だった。

「賢ちゃん…、いややわ、雨降ってきた」

美佐子は、賢一を覗き込んでいた目を、空に転じた。

夕立か。俄かに大粒の雨が落ちて来た。

「あ、美佐子、お前、時間あるか」

「うん、お茶飲むくらいなら」

二人は近くの喫茶店へ飛び込んだ。

ついさつき自分の身に起きた事、賢一には理解出来ないことだらけなのだが、その中でも賢一が一番気になっていること、山吹が至福の表情で死んでいったことについて、美佐子の意見が聞きたかったのだ。

賢一と美佐子は、家が近所で、幼稚園から高校まで一緒だった。

まあ、都会とは違うし、今とは時代も違う。中学受験とかとは無縁だったし、ましてや、小学校、幼稚園で私立に行く者などなかったから、近所で同じ年に生まれれば、必然的に中学までは一緒である。あと、学力が同じくらいなら行く高校も同じになる。だから、幼稚園から高校まで一緒だったと言っても、特別珍しいことではない。

小学校、中学校、高校と、美佐子は優等生だった。勉強は勿論、スポーツ万能、その上、かなりの美人でスタイルも良い。男子の憧れの的だった。

賢一は、憧れという感情とは少し違うが、美佐子の能力を認め、彼女に一目置いていた。高校時代の一時期、つきあつてののかな、と思えるような関係になったこともあった。が、それ以上進展せずに終わった。いや、そもそも正式にどちらからも、「つきあおう」とは言っていないのだから、終わったという表現はおかしいのかもしれない。

賢一は、大学のサークルで知り合った女性とつきあい、結婚した。

妻は、優秀な美佐子とは違い、何処にでもいるような、明るいだけがと取り得の、ごく普通の女性だ。それに、何処か頼りなく子供みたいところがあって、賢一は、「しゃあない奴やな」が口癖になっていた。

でも、なぜか一緒に居ると心が安らぐ。仕事で嫌なことがあっても、何の屈託もない妻の笑顔を見ると、「まあ、ええか」という気になる。そして、「俺がいなければ」と頑張ってしまうのだ。「不思議な奴やで、お前は」賢一は、いつも妻を見つめては溜息をつき苦笑していた。その妻との間に、今年二才になる息子がいる。

一方、美佐子は、大学は法学部に進み、在学中に司法試験に合格。この辺りで、美佐子は賢一の恋愛対象から完全に外れた。賢一にとって美佐子は、自慢の幼馴染み、尊敬する友達になった。百パーセントそうなってしまっていた。

美佐子も、学生時代、付き合っていた男性はいたようだ。同じゼミの学生で、一緒に司法試験を目指していた。だが結果は、美佐子だけが合格し相手は落ちた。合格発表の日、電話一本で一方的に別れを告げられたらしい。

合格祝いに一緒に飲んだ時、打ち明けられて、

「そんな尻の穴の小さい男、かえってよかったやないか」

そう言った賢一だったが、相手の男のことを悪く言うことは、何故か、少し後ろめたく、気が咎めた。

その後、美佐子は司法修習生の時一緒だった男性と結婚した。が、二年足らずで離婚。子供はなく、今は地元で弁護士をしている。

そんな賢一と美佐子は、今では二人とも忙しく、滅多に顔を合わすことはない。それでも、道でばったり会ったときなど、立ち話をしたり、喫茶店でお茶したりするのだ。賢一は、美佐子のことを、何でも話せて、悩みを打ち明けられる友達だと思っている。まるで同性の親友のようなつもりでいるのだった。

二人は、窓際の席に向かい合って腰をかけた。

「信じられへんか、まあ、そうやわなあ、俺かて、信じられへんもん。そやけどウソっちゃうんや。ホンマ、目の前で、山吹御前が、自害しはったんや」

賢一は、注文したコーヒーがテーブルに置かれ、店員が遠ざかるのを待って話を再開した。「別に、賢ちゃんがウソついてるとは思わへんけど……」

「けど……？」

「うーん、わたしかてそんな話、嫌いやないし、タイムスリップとかパラレルユニバースとか、あつたらええ、あつてほしいとは思うけど、そう思うことと、あると信じることはなあ、実際に体験した賢ちゃんかて半信半疑なんやろ。そやけど、賢ちゃん、ええなあ。うらやましいわ。わたしも行きたいなあ、タイムトラベル」

「なんや、なんのんの言うて、信じてくれる？」

「ほやから、全面的には信じられへんけど、あつたらええなああって」

「まあ、ええわ。それはそれとして、俺が一番気になってるのは、山吹御前の死に際表情なんや」

「至福の表情やったって言うたね」

「そうなんや、あんなに無惨で可哀想な死に方したのに、満ち足りた、ホンマ幸せそうな表情やった。なんであんな表情で逝けたんか、美佐子、お前、わかるか」

「うん、そやなあ、わからんこともないよ」

「えっ、わかるんか」

「なあ、賢ちゃん、賢ちゃんは、なんで、山吹御前が可哀想や思うん」

「なんで、従姉妹同士で身分は変わらへんのに、いつも巴御前の蔭に隠れて……。戦にも、巴御前は連れてつてもろてはるけど、山吹御前は見送るばかりで、最期かて、あんなところで、あんなふうに」

「そやなあ、けどな、最後の最後で、巴御前に勝ったて、思わはったんやないやろか」

「えっ、そりやまたなんで」

「自分だけが、義仲のところへ行けるて」

「そやけど、山吹は、義仲が死んでること知らんやで」

「解ってたと思う。解るもんやん、そういうので、何となく、もっと言うなら、巴御前を逃がすことも解ってた」

「そやろか」

「うん、そう思う。生きてる時は、なんで巴御前ばっかりって思ってたやろし、巴、消えてなくなれて思った時もあったと思う。それが、最後の最後で逆転した。巴と一緒に死ぬことを許されへんかったけど、自分は一緒に逝ける。勝った。巴に勝った。そういうことやろと思う。あ、賢ちゃん、乱暴目的の侍に山吹が抵抗しおうせてた言うてたよね。ひよっとすると、賢ちゃんが見た最期の時で、義仲さん、心配で、迎えに来てはったんかもしれへんよ。必死で山吹守って、自害する時間与えたんかも知れへん」

賢一は驚いた。

美佐子の言った内容は、賢一が想像すら出来ないようなものだった。

(でも、逆転か)

賢一は、逆転と言う言葉にひっかかった。

なるほど、今の美佐子の意見が正しいとするならば、山吹は、勝ったと思っている。そういう意味では、山吹の側では逆転かもしれない。山吹の最期の至福の表情も説明はつく。が、巴の側では、負けたとは思っていない。思う理由がない。

(これって逆転だろうか)

賢一がそう言うと、美佐子は、寂しそうに微笑んだ。

「思ったと思う。負けたって、巴」

「えっ、そんな、そう思う理由なんかないやん」

「ううん、ある。あるんやて。義仲が最期に選んだのは、自分やなかった。山吹やったって」

「そんなん、義仲の意志やないやんか」

「そらそうや、理屈で考えたらな。でもな、理屈っちゃうんよ。こういう問題って。まあ、こう言うたかて、賢ちゃんにはわからんやろけどな」

「なんや、その言い方やったら、まるつきり、俺が女心のわからん奴やて言うてるように聞こえるけど」

「うん、言うてる」

「ひどいなあ」

「なら、解るん？」

「そりやあ……、解らん」

「それみてみい」

そう言って、美佐子は笑った。その笑顔の中に隠れている淋しさに、その時、賢一は全く気付かなかった。

「平家物語の巴と義仲の別れのくだり、覚えてる？」

美佐子が訊ねる。

「なんとなく」

「義仲さんに、『落ちろ』て言われた時、巴、ショックやったと思う。予想してたやろけど、

ううん、予想してただけに、やっぱりって。それに、この人は最期の時に私が居らんでもええんやなって、すごく寂しかったと思う。山吹への対抗意識から、このひとは私が居らなあかんて思うようになってたかもしれへんから」

「そやけど、それは義仲の優しさやん。勿論、女を戦に連れていたって思われたないいう見栄もあつたやろけど、やっぱり、巴を道連れにはでけんいう、男の優しさやつたと思うけどなあ」

「優しさなあ。でもな、そんな優しい人が、自分が死んだ後、巴、どうやって生きて行くんやろって、なんで考えへえんかつたんかなあ」

「そやかて、巴は、そんな柔な女性やないもん。別れ際も、最後の働きやとかなんとか言うて敵一人倒して落ちて行つたんと違たっけ」

「そやねん、巴の哀しいところは。普段から言われてたんちゃあうかなあ、お前は大丈夫やて、一人でも大丈夫やて。で、知らず知らずに、巴もそれにこたえなあかんような気になつて、別れ際に、敵一人倒して去つていく、みたいなことしてるけど、ホントの気持は、最期まで一緒に居りたい、義仲さんに縋りたかつたんやと思うよ」

「そうかなあ。そやつたら、縋つたらよかつたんちゃうん。義仲さんも、へえ、こんな可愛い面もあつたんかて、見方、変わったかもしれんよ」

「そやなあ、それができたらよかつたんかも知れへんなあ。そやけど、そうするには、今まで、あまりにも、お前は一人でも大丈夫やつて、言われすぎたんとちゃあうかなあ」

「そういうもんかなあ」

賢一は、溜息と一緒に咳いた。

完全に納得したわけではない。でも、美佐子の静かな表情を見ると、何故か、言い返すことが出来なかった。

美佐子は、冷めてしまったコーヒースプーンをかきまわしながら、ボソリと言った。

「男て、なんで勝手に、こいつは大丈夫やと思うんやろ。その挙句、最後に選ぶんは、これも勝手に、自分が守つたらなあかん思う人なんや。独りで大丈夫な女なんて、ううん、独りで大丈夫な人間なんて、おらへんに」

「美佐子、おまえ……」

(こいつ、自分のこと言うてるんか)

賢一は、美佐子を見た。

離婚の原因は、元夫の浮気だと聞いている。弁護士事務所の事務の女の子に手を出したということだ。初めはほんの遊びだったと思う。それが、相手に子供ができた。

美佐子との間に、欲しくても出来なかつたというわけではない。仕事優先で、暫くは子供はつくらない。それは、夫婦間の暗黙の了解事項だった。

別れ際にでも言われたのだろうか。お前は独りでも大丈夫な女だ、とかなんとか。

美佐子は、独り言のように続けた。

「巴は、義仲さんが葬られたところに庵結んで、菩提弔ろうて、そして自分もそこで八百年も……。山吹のこと心配して、こっちの方向にいる義仲さんと一緒に居っても、つらいだけやろに……。あほやなあ」

離婚を言い出したのは美佐子の方だったらしい。相手が別れてくれと言い出す前に、不貞夫に三行半をたたきつけた。それで、美佐子のプライドは、辛うじて保たれたのだろう。

でも、それが本当に、美佐子の望んだことだったのだろうか。
美佐子の巴に対する「あほやなあ」という言葉に、静かだが切ない淋しさと、ほんの少しの羨望の気持ちを感じたのは、賢一の気のせいだろうか。

賢一は、じつと美佐子の手元を見つめた。

三十年以上の付き合いなのに、こんなにじつと美佐子の手元を見るのは初めてだ。スプーンを持つ美佐子の手の指は、しなやかに細く、どこか頼りなげだった。

賢一の視線を感じたのか、美佐子は顔をあげ、フツと、淋しそうに笑った。そして視線を賢一から外し、窓の外を見遣って、静かに言った。

「賢ちゃんかて」

「えっ、俺？」

賢一は、不意に自分の名前が出たことに驚いて顔をあげた。

賢一の目の前には、美佐子の知的で端正な横顔があった。

「私のこと、選んでくれへんかった」

外の雨はいつしか止んでいた。